目次
研究余瀝Ⅱ 1
1989年度「一般研究」選考結果 4
真宗大谷大学の性格について(下) 5
Buddhist Studies in Sri Lanka: 1988 Y. Karunadasa 8

大谷大学真宗総合研究所
研究所報
No. 21 1989. 3. 30.

研究余瀝Ⅱ

真宗総合研究所長 渡辺貞麿
(教授・国文学)

梅の花を見たまひて　花山院

色香をば思ひもいれず梅の花
　　常ならぬ世によそへてぞ見る

(新古今和歌集・巻16・雑・1444)

自分の文章のゲラ刷りを校正していたときのこと、そこに引用したこの歌を見て、私の心に、はてとひっかかるものがあった。うつろう花の色に人の世の常ならぬさまを思うのは、日本人にとっては、伝統的な発想法と言える。そのことを示す材料のひとつとして、私は上の花山院の歌を掲げていたのである。

だが、再度この歌を見なおした時に、私の心にひっかかったというのは、いささか理屈めきはするのだが、――うつろう色や香に思いを致すことなく、梅の花を「常ならぬ世によそへ（る）」ことができるか――ということであった。うつろう花と人の世の無常とをかさねあわせて思う、それは、「石長比売を返さしめて、ひとり木花の佐久夜比売を留めたまひき。故、天つ神の御子の御寿は、木の花のあまひのみまさむ〈木の花のようにただもろくはかなくていらっしゃるであろう〉」と語られている『古事記』(上) ニニギノミコトの物語が、すでにそうであった。

「うつ蟬の世にも似たるか花桜さくと見しまにかつ散りにけり」(古今集・73・読人知らず)。「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」(同・113・小野小町)。「朝顔をなにはかなしとおもひけむ人をも花はさこそ見るらめ」(拾遺集・383・藤原道信)。「ませのうちなる白菊も　うつろふみるこそあはれなれ　我らがかよひてみし人も　かくしつゝこそ離れにしか」(古今著聞集・巻8・好色)。これらの和歌や今様の発想法もまた、うつろう花と人の世のはかなさとをオーバーラップさせるところに成り立っていた。梅の花に人の世の無常を見るためには、その花の色、香の久しからぬことに、まず思いをはせていなければならないはずであろう。

だが、花山院は、「色香をば思ひもいれず」、梅の花を「常ならぬ世によそへて」見た。それはなぜか。

ここで、現行の有力な注釈書の解釈を、いくつか注目してみよう。

日本古典文学大系『新古今和歌集』。世人は梅の花の色香を愛でるが、自分はそういう点には心が引かれなくて、梅の花をば、咲けばやがて散るので世の無常になぞらえてみることである。

日本古典文学全集『新古今和歌集』。美しい色や香を心にとめることもなく、梅の花を無常の世になぞらえて見ることだ。仏道に生きていられた作者は、美しい梅の花にも、やがて散るその姿に無常の理を思いうかべられた。ご感慨のきびしさが声調にうかがわれる。

日本古典文学大系『和漢朗詠集』(この歌は、『和

漢朗詠集』上にも載せられている)。梅の花の色香のすばらしさよ、しかし私はそのすばらしさにひかれて執着するのではない。花の咲き散るすがたに無常な人間の世をよそえてみるのだ。

「昔男」は、散る花を惜しんで、「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」と詠んだ。散る花を惜しむ心は、すき心、それは仏教的な立場からは妄執と言えよう。上掲の諸解釈は、「色香をば思ひもいれず」を、その妄執を止揚する言葉として受けとめている、という点で共通する。だが、花を愛(め)で惜しむ心を妄執としていましめるという立場は、それほどに大見得をきって詠まねばならぬほどの複雑高度な境涯であったか。鴨長明『発心集』(第1)には、次のような話も語られている。

> 六波羅寺の住僧幸仙と云ひける者は、年来道心深かりけるが、橘の木を愛し、いさゝか彼の執心によりて、くちなはと成つて、彼の木の下にぞ住みける。委しくは伝にあり、加様に人に知らるゝはまれなり。すべて念々の妄執、一々に悪身を受くる事は、はたして疑ひなし。実に恐れてもおそるべき事なり。(六波羅寺幸仙愛橘木事)

「委しくは伝にあり」という伝とは、『拾遺往生伝』(中・3)のことであろうが、この話はそれよりさかのぼっては『大日本国法華経験記』(上・37)にも載せられ、くだっては『今昔物語集』(巻13・42)にも語られている。まさしく「加様に人に知らるゝはまれ」なる話であったのである。しかも『今昔物語集』(巻13・43)には、紅梅を愛したが故に、死後、蛇身を受けたという少女の話も語られている。花を愛(め)で惜しむ心が妄執であること、仏教の側からすれば止揚すべきものであることは、花山院ならずとも、長明ならずとも、知識人と呼ばれるような階層の人びとならば、誰もが知っている常識だったのである。しかも、花に人の世の無常を思うという発想自体が、すくなくとも日本人にあっては、常套的なものなのであった。花山院は、それほどに陳腐な歌を、それほどにしたり顔で詠んだのであったのか。その上、仏教そのものの側からしても、独覚は飛華(ひけ)落葉を見て無常の理を悟るということは、古来、言われていることであった。

これに対して、今井源衛氏『花山院の生涯』には、いささか視点の異なる解釈が示されている。

> 「この歌は古今和歌集上春一、友則の『君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る』、或いは素性法師『よそにのみあはれとぞ見し梅の花飽かぬ色香は折りてなりけり』などを本歌としているであろう。然し、人の意表をつき裏がえしにした奇矯さが目に立つ」。

だがしかし、「三身如来を観ずる心をよませ給うける世の中はみな仏なりおしなべていづれのものとわくぞはかなき」(千載和歌集・釈教)と、高度な天台本覚論の哲学を詠み得た花山院が、はたして「人の意表を」ついた、「裏がえし」の発想といった才子めいた次元に、能事足れりとばかりあぐらをかいているであろうか。同じ無常を詠むにしても、「無常の心を　たゞしばしおくれ先立つくらべ馬のはしりけならぬ世にはあらずや」(夫木和歌抄・27・くらべ馬がおくれ先立つといってもただしばしのこと、人の世にしても、所詮、それと異なってはいないではないか)という詠には、上掲の諸解釈における無常感よりも、はるかに透徹した諦念のきびしさがうかがわれはしないであろうか。

ではこの歌は、ほかにいかなる解釈が可能なのであるか。色と香とを連ねて詠んだところにキー・ワードがありはしまいか。この歌の詠まれた事情は、『古今著聞集』巻五によれば、

> 「花山院みぐしおろさせ給ひて後、叡山より下らせ給ひけるに、東坂本の辺に紅梅のいと面白う咲きたりけるを、立ち留らせ給ひて、しばし御覧ぜられけり。惟成弁入道御供に候ひけるが、『王位をすてて御出家あるほどならば、これていのたはぶれたる御ふるまひはあるまじき御事にさふらふ』と申し侍りければ、よませ給ひける」

と伝えられている。花山院、二十二歳頃の事か。花山院十九歳の出家をめぐっては、劇的ないきさつもあったようではあるが、今はさておく。

なるほど、これが、侍者惟成入道のそうした叱咤に応えての反論の歌ということであるならば、上掲の諸解釈に示されたが如き内容は、一応は、つじつまが合う。この『古今著聞集』の説話をふまえての、江戸期の解釈がすでにそうであった。だが、一歩たちいってみれば、そのようなするどい問いかけに対する反論としては、この諸解釈の内容では平凡でありすぎる。というより、教科書通りでありすぎるのではないか。

「紅梅のいと面白う咲きたりける」姿に、人の世の無常を「よそへて」見たというのは、上掲の諸解釈にもうかがわれるが如く、やがて散るその梅の花のさだめと、一切が滅びに向う人の世のさまとを、オーバーラップさせたということなのであろう。すなわち、院はこの時、梅の花に人の世の滅のみを見ていた。だが、「無常」とは、四句の無常偈にもあきらかな如く、「生滅ノ法」なのである。生は滅の前提であり、滅は生の前提であった。してみれば、年々に咲き、散るをくり返す梅の花は、それ自体として「生滅ノ法」という絶対普遍の真理を示していた。咲き、散るその姿は、現象として無常であっても、「生滅」の「法」において常住なのであった。それ故にこそ、天台教学の聖典たる『摩訶止観』も、そしてそれをふまえた『往生要集』も言う。「一色一香中道ニアラザルハ無シ」〈ひとつの色、ひとつの香という現象も、それ自体として永遠の真理のあらわれでないものはない〉と。

天台教学において「色香」が、かかるものとしてとらえられていたのであるならば、そのことに思いを致さずに、梅の花に人の世の滅という無常をのみ見るというありようは、叡山での修行を経た身としては、まさしく「たはぶれたる」ものと言はねばなるまい。すくなくとも花山院は、この時の惟成入道の叱咤を、そのような意味のものとして受けとめた、そして愕然とした、――かかる視点をこの歌の解釈にインプットしよう。次の如き意味が導き出される。

惟成よ、お前の言う通りだ。「一色一香中道ニアラザルハ無シ」という、梅の色香が示している常住なる真理に思いを致さずに、私はおろかにも、梅の花を人の世の、滅びという無常にのみよそえて見ていたことだ。

この解釈が、はたして作者花山院の意にそうものであるや否や、そのことを直接的に証明する資料を、すくなくとも私は知らない。だが、「世の中はみな仏なり……」と詠むことのできた花山院であるならば、そして、この比叡下山ののち、ふたたびきびしい山岳修行に身をゆだねた花山院であるならば、上に示した私の解釈の如き花山院は、それは、あり得べき花山院像なのではあるまいか。

ちなみに言う。この時、梅の花の下で花山院を叱咤した惟成入道は、その年の十一月死去する。花山院の早々の下山は惟成の病気故のことであるとも言われている。花山院が梅の花に人の世の無常を見たのは、ひそかに惟成の病身を気づかってのことであったかも知れない。惟成の叱咤は、迫り来る自らの死を予感しつつ、そして院の自分への思いやりを感じとりつつ、その上での病苦をおしてのものなのであったかも知れない。

研究所出版物の御案内

- 『研究所紀要』No 1 ～No 6
- 『研究所紀要』No 4 別冊
  別冊 1『教行信証』科文集
  2『教行信証』の基礎的研究に関する報告
  『教行信証』「化身土巻(末)」校異
  研究雑誌所収『教行信証』関係論文目録
- 『上首寮日記』Ⅰ（真宗学事資料叢書）
- 『上首寮日記』Ⅱ（真宗学事資料叢書）
- 『真宗学事研究関係文献目録』
- 『大谷大学図書館蔵　西蔵文献目録索引』
- 『大谷大学図書館蔵　西蔵大蔵経丹殊爾勘同目録』Ⅱ-1
- 『大谷大学図書館蔵　西蔵語訳大唐西域記』
  (大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書 No 1)
- 『大谷大学図書館蔵　知識論決択広註善釈要集』
  (大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書 No 2)
- 『研究紀要』「浄土の諸問題」No 1 ～No 3

上記出版物を販売しておりますので御希望の方は、研究所の方へお申し込み下さい。なお価格は、『紀要』No 1、￥1,500、No 2 ～No 4、￥2,200、No 5、￥2,000、No 6、￥3,300、『紀要』別冊 1、￥3,600、別冊 2、￥4,000、『目録索引』￥4,000、『勘同目録』￥4,500、『大唐西域記』￥18,000、『善釈要集』￥18,000円、『上首寮日記』Ⅰ￥3,000、『上首寮日記』Ⅱ￥3,500円、『研究紀要』￥700、『文献目録』￥500でお頒ちいたしております。

大谷大学真宗総合研究所

1989年度「一般研究」選考結果

1989年度の「一般研究」が、研究所委員会において審議・選考され、下表のように決定された。共同研究２件、個人研究５件でいずれも新規の採用である。臼井教授代表の共同研究では『教行信証』の思想的研究を行ううえで、書誌学的研究に基いた完璧なテキストの作製が必要であるが、このために『教行信証』の原典にある異体字などのそのままを復元し、諸版本の校訂も行う。「証」「真仏土」「化身土」（本）の研究が中心となる。内藤教授代表の共同研究では、ペタル・グベリナ博士に提唱された言調聴覚論に関して、聴覚障害教育とともに外国語教育に対するその意義について研究を行う。

加藤助教授の個人研究では、分子生物学の領域で問題とされる遺伝子について構造解析を行う。

佐々木助教授の個人研究では、平安朝の大寺院の管理運営組織と人的組織について、寺院の文献史料や現行の行事によって考察する。

沙加戸専任講師の個人研究では、浄瑠璃のもつ仏教性と浄瑠璃史における近世庶民仏教の果した役割について明らかにしようとする。

中森専任講師の個人研究では、日本水泳の伝統的流派である観海流の伝播の実態について究明する。

三明専任講師の個人研究では、昭和初年に真宗教学者の曽我量深・金子大栄両師が大谷大学から追放された事件を、たんに事件史としてではなく、真宗教学の視点から解明する。

とくに今年度の一般研究は、広範な分野にわたっており、本学の研究全般の活性化に大いに貢献するものと期待されている。

1989年度一般研究

(A)共同研究

研究代表者	研究テーマ及び研究組織	補助額
臼井　元成教授	「『教行信証』の書誌学的研究」 研　究　員　臼井元成、幡谷明（以上教授・真宗学）江上浄信（助教授・真宗学） 研究補助員　小妻典文、田村健一（以上博士課程） 吉田宗男　調晋一（以上修士課程）	100万円
内藤　史朗教授	「外国語教育と聴覚障害教育における言調聴覚論の研究」 研　究　員　内藤史朗（教授・英文学）、岸繁一（教授・独文学）、岩見至（教授・仏文学）、鈴木繁一（助教授・英文学）、加来一丸（助教授・仏文学）、櫛原孝（専任講師・言語学）、禿憲仁（専任講師・独文学）、築山修道（専任講師・英文学）	100万円

(B)個人研究

研究代表者	研究テーマ	
加藤　尚子助教授	「Ｔ３ファージ、プロヘッドのコネクターの分離と構造解析」	50万円
佐々木令信助教授	「平安朝寺院組織の研究」	50万円
三明智彰専任講師	「昭和初年曽我量深・金子大栄　大谷大学追放事件の研究」	50万円
沙加戸弘専任講師	「浄瑠璃の仏教的研究」	50万円
中森一郎専任講師	「日本泳法の伝播に関する研究 ――観海流の伝播に関する基礎的調査研究――」	50万円

『真宗学事研究』研究会報告
日時：昭和63年3月23日(水)
場所：研究所会議室

〈指定研究〉

真宗大谷大学の性格について（下）

大谷大学非常勤講師　櫻部　建
(仏教学)

それからもう一つは、大正という時代。これも新しい大学にしあわせしたんじゃないかと思うんですね。大正の初期に第一次世界大戦が起こって、日本はあまり被害をうけないで戦勝国になって、経済的にも発展した。好景気時代が暫く続いたそうですし、大正デモクラシーといわれるような文化面の繁栄があった。そういうものも、新しい真宗大谷大学の歩みに勢いを添えたと思いますね。

そういうことからすれば、真宗大学が西へ移ったのは、先にも言ったように一種の策謀、それもやっぱり政治的といってよい、我々の感じからすれば不純な動機も随分あったと思うけれども、結果としては、必ずしも悪い事ばかりではなかったじゃないのかという気がします。それによって、清沢先生以来の新しい宗門の教育理念が挫折したというような事を考えるのは少し考え過ぎじゃないか、ということを思うのであります。学生もですね、京都に帰って、真宗大谷大学が開校されてから、次第にいい人が集って来たんですね。まず、質より量の方で申しますと、量はかなり増えてます。巣鴨の真宗大学時代の学生の数よりはるかに多くなっておるんですね。多くなっていると言っても、今日のようなマンモス教育時代から言いますと、そりゃ問題になりませんけれども。元来、真宗大学というのは実に小さい大学だったらしくて、全部で二百人たらずの学生しかいなかったんじゃないかと思うんですけれども、真宗大谷大学になりますと、年々四、五十人入学してきて、五年間の課程ですから、研究科の学生もいれると、かれこれ全学で三百人位の人数になるんですね。巣鴨の真宗大学に比べれば、一倍半以上になったと思います。もちろん、学生が増えたというのは、日本全体の経済のレベルが上がって、大学に進学する人が増えたということの方が大きな理由で、真宗大谷大学ができたから、学生が多く集まったと考えるのは、間違いだとは思いますけれども、ともかく学生の数は増えた。そして、なかなかいい学生が育っていると思うんですね。その後の大谷大学を背負った学者の方が、続々と輩出しております。東京の真宗大学から京都の真宗大谷大学になるその過渡期の人、つまり、真宗大学で入学して真宗大谷大学で卒業した人というのは、明治四十五年の卒業生から大正四年の卒業生までですけれども、その中でのちに学者になった人だけをひろえば、まず、日本仏教史の日下無倫教授がいらっしゃいます。日下先生は、真宗大学の学生として、反対運動のリーダーになった一人で、「真宗大学破滅のてんまつ」という文章の中にも名前が出てきますけれども、南条先生以下の訓諭を聞いて、真宗大谷大学へ移り、明治四十五年に卒業していらっしゃいます。その次は大正二年ですが、のち同朋大学の学長になられた山上正尊氏などがその年の卒業生です。大正三年には、日下先生と並んで山田文昭門下の歴史家としてのちに東洋大学にあって活動された藤原猶雪博士が出ております。やがて大正五年になりますと、純粋に真宗大谷大学育ちの卒業生、つまり、入学した時も真宗大谷大学の学生として入学して、卒業した最初の人が出ます。大正六年卒業の、これも史学畑、日本史・日本仏教文化史などで活動された橋川正先生というのは、大変な俊才だったらしいけれども、割に若くしてお亡くなりになりました。大正七年は、実りの多い年で、誰でも名前を知っておる、後の東京大学教授宮本正尊、それから、大谷大学の学長を長く勤められた山口益というような方々が出られた年であります。その次の年大正八年には、真宗学の正規含英先生とか、名畑教授の御親父の名畑応順先生とかいうような方があります。そんな風にですね、年々、のちに学者として一家をなした人々が輩出しております。学者だけでなくて、随分いろんな方面で活躍した人もあって、変ったところでは、のちには少し国粋主義に傾いて、戦争時代、右翼的な論陣を張った井上右近氏も大正五年の卒業生ですし、これも操觚界で活躍した藤井草宣氏が大正九年ですかね。それから、仏教学以外の学者としては、国文の筧五百里さんだとか、随分特長のある学者が出ておるんですね。

こういう点から言っても、真宗大谷大学の十年余りというのは、大学として；けっして縮んだ元気のない時代であったとは思えない。活々としておったように思うのです。それは、「無尽燈」の紙面にも反映されています。「無尽灯」は学術雑誌ではなく、学術論文もたくさん載っ

ておりますけれども、漢詩や俳句やら和歌やらも載っておる。時事評論みたいのも載っておる。随分多彩な雑誌であります。のちにですね、そういうごちゃまぜな雑誌はあまりよくないという考え方が起ったらしくて、学術雑誌と文芸その他を載せる雑誌とに分かれるんですね。学術雑誌は「仏教研究」という名前になり、それから文芸の方は「合掌」という雑誌になります。それは真宗大谷大学の末期です。大正十年位だと思います。そして、その「仏教研究」というものがまもなく改題されて「大谷学報」になるわけです。大学の方も真宗大谷大学から大谷大学になり、「仏教研究」は「大谷学報」となって今日に続いておるのであります。それで、真宗大谷大学時代が、けっして沈滞した縮んだような空気でなかったという事はですね、「無尽燈」に載っておるもろもろの論文やら評論やらを読みますとよくわかるので、もし皆さんお時間がありましたら、一度ページをひもとかれることをお勧め致します。学術論文の中には、後代に大きな影響を及ぼしたものもいくつかあります。こんなことをこの頃すでに書いておられたのかと驚くような文章もあります。ことによると、昭和六十二年度の「大谷学報」より充実しておるんじゃないでしょうか。

それでですね、今まで申しましたことで、ほぼおわかり願えるかと思うのですが、真宗大谷大学というものは、真宗大学のうらがえしではなくて、むしろかなりな程度に真宗大学の継承であったと言ってもいいと考えるのです。そしてそのように、多少の軋轢があったにしても、全体からみればスムーズな継承をなさしめたのは、それは一にかかって、南条先生の徳、学徳であったと思うんですね。その意味で南条先生の存在はたいへん大きいと思うんであります。それともう一つは、さっき言いましたように、京都という土地が、いわば新しい学問の土地、新しい学問の芽ばえる場という勢いを、当時もちつつあったんじゃないかと思うんですね。そういう事は、真宗大学を京都に移して真宗大谷大学にした人達が予期した事ではなかったでしょうけれども、結果としては、真宗大谷大学に幸いしたんだと言っていいと思います。

一方、悪い点を考えれば、巣鴨の真宗大学の当事者が当時案じたように、本山のひざ元である京都へ移ったことが色々な意味で宗務当局側からの規制を強くしたという事はあったかもしれないと思うんですね。東京にあった頃は自由な野に放たれておったものが、京都へ戻されて監視つきになったという、そういう感じをですね、当時の若い人達はもったようでありますが、それは全く当らないことではないと思います。そういう事は多少はあったに違いない。けれども、さっき言いましたように、真宗大谷大学になって守旧派に全面降伏して、巣鴨時代とすっかり変ってしまったのだという風には、「無尽燈」を見る限り到底思えないのですね。

これで私の申し上げる事は、ほぼ尽きたのでありますが、最後に一つ付け加えて申したいのは南条先生の学徳、お人柄という事であります。南条先生が長者の風格をもったお方であったことは多く語られています。人を叱りつけたりするということはほとんどなかったようだし、学長の職にあっても、細かい事は、みな下の者に任せて、うるさく干渉をしたり指示したりするということは全くない人であったという。ですから、まことに温厚な長者という感じが一番強いのでありますけれども、しかし、ただ温厚な包容力のある人というその一面だけで南条先生をみるのは、やっぱり少し偏っているというか、足らんところがあるといわなきゃならんと思うのですね。というのは、南条先生という方は幕末に生をうけて、幕末維新前後の動乱に身を晒していらっしゃる。大垣藩の藩兵にさせられて、長州の兵隊と戦争をやりかねんような事があった。それはやらんで済んだのですけれども、ひとつまちがえば戦争に出なきゃならんような、そんな目にまだ十六、七歳の時にあっておられる。やがて、明治維新になり、廃仏毀釈の嵐、全く未知の西欧世界への留学、実に様々な体験を経ておられるのですね。それで、晩年の学長時代の先生から多くの人が感じる温厚な長者という風格だけではけっして律し得ないものが先生にはあったと思うのです。

その一例を申し上げますと、イギリスからお帰りになってまだ間もない頃、東京にいらっしゃって、主な勤めは華族女学校の英語の先生、今の学習院大学、以前は学習院女子部といいましたかな、そこの英語の先生をしておられるのですね。そのかたわらいろんな所へ出講しておられますけれども、そんなことをしておってですね、痔が悪くなって熱海の温泉へ療養に行かれる。温泉にしばらくおって、大分よくなって東京へ帰ろうと思っていると、そこへ雲照律師という、当時名声の高かった真言宗の高僧から手紙が来る。それは、何とかいう人が今ヨーロッパへ旅立ちをしようとしていて、あなたに会ってヨーロッパの様子を聞きたいし、あなたに向こうに届けたいものがあれば自分が持って行って届けていいと言っているから会わないか、という手紙なんですね。それで南条先生は、熱海の宿をひきあげて、横浜へ来てその人に会うわけです。その人は明日横浜港を出帆するのだという事で、いろんな話をしている間に、南条先生が、自分は欧州からの帰りに是非釈尊の旧跡をめぐりたい、インドへ寄りたいと思っていたのに、いろんな都合でアメリカ回りで帰ってきたのでインドへ行けなくて残念だったという話をされるんです。そうすると、今からヨーロッパへ行こうとする人がですね、それならあした一緒に行かないかと言うのですね。費用は私が立て替えましょう、と言って二千円出そうと申し出る。当時の二千円というのは相当な巨額だと思うのですけれども、初対面の人に私が出しましょうといわれてですね、南条先生、即座にその気になってしまう。それで、直ちに華族女学校やら

いろんな所へ辞表を書いて、一晩のうちに荷物をまとめてしまう。自分の荷物をまとめたら行李に一杯しかなかったから、我ながら哀れだと思ったと先生は書いておられますけれども、一晩でまとめられた荷物を浅草の別院に預けおいて、翌日横浜から欧州ゆきの船に乗ってしまうのですからね。そういう一面があったのです。今日の我々には一寸おどろきであります。ポンと二千円を出そうとする人も人です。けれども、即座にそれに応じて華族女学校の職をただちになげうって、一も二もなく同行してしまうというような決断力というか行動力というか、そういうものはですね、南条先生がただ温厚な長者というような一面ばかりでなかったという事を示していると思うのですね。

一方で先生は宗門に対しておそろしく忠実です。当時の洋行帰りの新知識というものは天下の名士でありますし、南条先生のイギリス時代の同学の留学生というのはみな明治政府に仕えて顕官になっておったわけですから、世間では当時超一流の名士たちに伍しておられたわけですけれども、その先生が御法主やら御連枝のお供をして地方を廻るというような事を命のままに謹しんでやっていらっしゃる。そういう宗門に対するほとんど誠忠といってよいような一面もあります。また一方ではですね、先生は宗政に対して、実に批判的な態度をもっておられた人で、一切そういうものに積極的にはタッチされなかった。避けられるものはなるべく避けていらっしゃった。先生の名声と実力と、それからくる人望があって、まぁ、しょっちゅういろんな所へ引っぱり出されてはおったようですけれども、宗政に対しては、一生涯きわめて冷ややかな態度で、距離を置く姿勢でおられたようですね。洋行から帰られたとき、船は横浜へ着くのですね。さっき申しましたようにアメリカ回りで、大西洋を渡ってアメリカ大陸を横断し太平洋を渡って帰って来られたので、横浜へ船が着く。上陸すると早速、宗務所からの出迎えの人に今後の行動について捜りを入れられそれとなく警告される、ということがあった。当時九年も留学してイギリスから帰ったといえば、それだけで非常な名声をえられることになったわけでしょうから、そういう光彩陸離たる新帰朝者南条先生の動きをすでに時の宗務当局が警戒してですね、掣肘しておるのですね。自分はそんな政治的な場で動く気は少しもないのに、京都の人達はこんなにまで気を回すのかと、内心苦笑したという事を書いておられます。帰朝した当座でさえ、すでにそういうことがあって、その後ですね、南条先生は京都に素直に戻られなかった。だいたい東京におられるのですね。真宗大谷大学の学長になってからも、先生の生活の本拠は東京です。京都へ来られた時は、今ありませんけれども東本願寺の前に丹平（たんぺい）という宿屋がありましてね、そこが南条先生の常宿だったようであります。何でそんな事を私が知っておるかというと、私の学生時代の同級生、仲の良かったのが、ある会社員の家に下宿しておりました。私も何度かそこへ遊びに行っているうちに、その家の奥さんが元は宿屋の娘で、その宿屋「丹平」が、南条先生の京都へ来られた時の常宿であったということを知りました。南条先生の思い出話もその奥さんから聞いたことがあります。私が話を聞いた頃はいいおばさん、初老の婦人でありましたが、その人がまだ娘時代、南条先生が「丹平」にお泊りになるとお給仕に出た。で、宿屋のお膳だから新しい割箸がついている。ところが先生はけっして割箸を使われない。毎日新しい割箸を割って使うのはもったいないからと言って、南条先生の箸が宿屋に預けてあって、いつもそれでおあがりになったというような話を聞いた事があります。宿屋に先生は泊まってそこから大谷大学にも出勤されたのですね。休暇なんかになればもちろん東京へお帰りになったのでありましょう。南条先生が京都に居を持たれなかったのは、やっぱり宗政に対し距離を置きたいという気持ちがあったにちがいないと、私は想像します。

これもまた先生の人柄を示すエピソードだと思いますけれども、学長になるよりもずっと以前、明治二十年代の終わり頃ですか、例の白川党事件というのが起こりますね。若き日の清沢満之師等が、宗政に対する改革意見を掲げて運動を起こす。そこに若い人達が呼応して大きな事件になります。その頃、村上専精博士も南条文雄博士も中学の校長さんですね。どっちが真宗京都中学でどっちが真宗東京中学だったか忘れたが、二人はそれぞれ校長です。それがどちらも運動に身を投じて改革派側に立たれるわけです。ところが村上専精先生（村上さんが東京中学の方でしたな）は東京の中学を抛っておいて京都へやって来て、あっちこっち大弁説をふるって廻られたらしいのに、南条先生は、改革派側に立つことは立たれたけれども、そういう事はあまりされなかったらしく、改革派の大講演会が催されてそこへ顔を出された時も、弁士たちがこもごも立って本山のあり方を批判する演説をやっているうちに、南条先生の番になると、壇上に立って、明治天皇のお母さん、孝明天皇の皇后ですね。その方が当時亡くなられて英照皇太后という諡名をされた。その諡名の「英照」というのは、どういうところから取られたかということを、すなわち（南条先生はサンスクリット学者であられた一方でまたたいへん漢籍に詳しいお方でありますから）英照という名前の漢籍上の出典を、延々と話されたというのですよ。それで聞いていた一同は、唖然としたという事を安藤州一教授が書いています。それはまぁ、普通の者ならそんな場でそんな話をしたら野次り倒されたかもしれませんけど、南条先生ですから、みんなまぁ黙って聞いていたが、あんまり場違いな話だったので驚き呆れ拍子抜けしたというのですね。これも、政治的な運動などに対しては超然とした態度をとりたい、あるいは、そういうものに距離を置きた

いというお気持が南条先生にあったことを示す一つの挿話であると思うのですね。まことに南条先生という方は、人間としてもきわめて興味のあるお方だと思うのであります。

行ったり来たりして、一向まとまった話になりませんでしたが、このへんで。どうもありがとうございました。

(完)

Buddhist Studies in Sri Lanka : 1988

Y. Karunadasa
Postgraduate Institute of Pali and Buddhist Studies, University of Kelaniya

1. *Introductory*

Since Buddhism is the religion professed by the majority of the people in Sri Lanka, it occupies an important place in the school curriculum as well as in the university education of the country. In fact *Buddhist Culture* and *Pali,* which is the source-language of Theravada Buddhism, are two of the many optional subjects that could be offered for the annually held General Certificate of Education (Advanced Level) Examination, on the basis of which students are selected for the national Universities in Sri Lanka. The monastic seats of learning, known as *pirivenas* provide for an education, based on traditional methods of interpretation, which is specially geared to the needs of the Buddhist monks. Among the subjects of study are Buddhist Doctrines, Buddhist Culture, and such classical languages as Pali, Sanskrit and Prakrit. There are in all about 250 *pirivenas* situated in most parts of the Island and some of them get State funds for their maintenance.

2. *Buddhist Studies in the Universities*

There are in all nine universities in Sri Lanka, all maintained by State funds. Among them the following universities provide for studies and research in Buddhism:

2. 1 *University of Peradeniya*

Situated in the vicinity of the historic city of Kandy, the Peradeniya is the largest University in Sri Lanka. Its Buddhist studies programme is handled by the Department of Pali and Buddhist Studies. *Pali* or *Buddhist* culture can be offered either as one of the subjects of a General Course (three years) or as a subject of specialization (four years). Facilities for postgraduate research leading to M. A. and Ph. D. degrees are also provided. The University's Department of Philosophy which maintains a postgraduate course in Comparative Religion and the Department of Classical Languages, too, have certain sections of Buddhist studies represented in their syllabuses.

2. 2. *University of Kelaniya*

Earlier known as the Vidyalankara University, the University of Kelaniya is situated about six miles from Colombo on the Colombo-Kandy trunk road. Here, too, there is a Department of Pali and Buddhist Studies. The Department offers three separate courses, namely Pali, Buddhist Culture and Buddhist Philosophy and each of these subjects could be followed either as a subject of a General Course (three years) or as a subject of a Special Course (four years). Kelaniya has the largest number of undergraduates following courses in Pali and Buddhist Studies and of them the majority are Buddhist monks.

2. 2. 1 *Postgraduate Institute of Pali and Buddhist Studies of the University of Kelaniya*

Established in 1975 this Institute was earlier known as the Vidyalankara Institute of Buddhist Studies. Its present name, status and structure are all derived from the Postgraduate Institute of Pali and Buddhist Studies Ordinance, No. 8. of 1977 which came into operation on 1st January 1980. In terms of this Ordinance the Institute functions as an organization within the University of Kelaniya. Intended to be developed as a centre of excellence for Buddhist Studies, the Institute's curriculum is limited to postgradu-

ate studies and research. The Institute has three academic units corresponding to Buddhist Philosophy, Buddhist Culture and Buddhist Languages and the Head of each unit gives general direction to studies and research in each field of study. Teaching and academic supervision of research are done by a panel of teachers drawn from the Universities in Sri Lanka. Course work or research can be pursued either in Sinhala or English and the Institute welcomes both local and foreign students. Its programme of higher studies and research is based on the following courses of study and research programmes:

(a) Postgraduate Diploma (one-year taught course)
(b) Master of Arts (one-year taught course)
(c) Master of Philosophy (minimum of two years, through course-work and research)
(d) Doctor of Philosophy (minimum of three years, through research)

At present the courses provided by the Institute tend to concentrate on Theravada Buddhism, with the result that Mahayana studies remain less adequately represented. This circumstance is not due to any policy matter on the Institute's academic curricula but due to paucity of teachers qualified in Mahayana Buddhism and its source-languages such as Chinese, Tibetan and Japanese. In order to rectify this imbalance in the Institute's curricula, it has decided to seek assistance from Buddhist Universites and Institutes particularly in the countries of East Asia.

2. 3 *University of Sri Jayewardenepura*

Originally known as the Vidyodaya University, it is situated about ten miles on the Colombo-Ratnapura trunk road. Its Department of Pali and Buddhist Studies provides for both undergraduate and postgraduate studies in Buddhist Philosophy and Pali. Its Department of Cultural Studies and Classical Languages, too, has some elements of Buddhist studies represend in its syllabuses.

2. 4 *University of Ruhuna*

The University of Ruhuna is situated in the south of Sri Lanka in the provincial city of Matara, some hundred miles away from Colombo. Its Department of Buddhist Studies was established only last year and it intends to admit students for its courses from the beginning of next year.

2. 5 *Buddhist and Pali University of Sri Lanka*

This University occupies a unique place in the higher educational structure of the country since its academic curriculum is limited only to Buddhist studies and cognate disciplines. It was established in 1980 in response to an increasingly felt need to coordinate and restructure the education imparted by the *pirivenas,* the traditional seats of Buddhist learning. The University does not directly conduct any teaching programmes. Its main function is to hold examinations for which candidates are presented from four colleges affiliated to the University. Each college has its own administrative set-up headed by a Director. The four colleges admit only Buddhist monks who are provided with residential facilities. Laymen, too, can appear for University's examinations as private candidates. Although the University does not conduct any lectures for taught courses such as the B. A. and M. A., it handles all postgradute courses leading to research degrees such as the M. Phil and the Ph. D.

2. 5. 1 *The Dharmavedi Institute of Mass Communication*

This Institute which is affiliated to the Buddhist and Pali University of Sri Lanka was established in 1986, in order to provide the Buddhist monks with a theoretical knowledge and practical training in mass communication, so as to make them successful communicators of Buddhism's spiritual message to contemporary society through the modern means of mass communication. For this purpose the Institute conducts a Diploma Course, admission for which requires the successful completion of a degree from any recognized University. The course is a wide-ranging one designed to acquaint the candidates not only with the subtleties and nuances of the art of mass-communication, but also to provide them a good grounding on the Buddhist perspectives of current intellectual issues and social problems. During this year 45 students were admitted to the course.

2. 6 *The Buddhasravaka Dharmapitha*

This Institute is located in the ancient capital of Anuradhapura in the North-Central Province of Sri Lanka. It is a residential Institute of Higher Education exclusively meant for the Buddhist monks. From its very inception in 1967, it has been maintained by State funds. In recognition of its contribution to Buddhist studies, it was elevated to the status of a University in 1980. Where it differs from other Buddh-

ist institutions is that in its teaching programmes it follows the traditional methods of interpretation. Its six-year undergraduate course is designed to provide the candidates with a thorough acquaintance with the Sutta, Vinaya and Adhidhamma together with the attendant exegetical literature.

2. 7 *Buddhist Studies in the Universities*

During the year under review (1988) due to recurrent disturbances and the tensed situation in the country, except the Northern University of Jaffna and the Eastern University of Batticaloe all the other Universities remained closed for a comparatively long period. In view of this situation Buddhist studies and research in the Universities did not make any noteworthy progress. The examinations scheduled for the year 1988 could not be held and what is more new admissions to the Universities had to be indefinitely postponed.

3. *Encyclopaedia of Buddhism*

The above encyclopaedia is being compiled under the aegis of the Ministry of Cultural Affairs of Goverment of Sri Lanka. Its reference articles are prepared by a panel of local and foreign scholars and are edited and co-ordinated by an editorial board headed by the Editor-in-Chief. During the year under review (1988) three fascicules pertaining to the Volume IV of the Encyclopaedia were completed. They represent all reference-articles beginning with D and E.

4. *Buddist Publication Society*

This Society which has its headquarters in Kandy was established in 1958 as a non-profit organization for the purpose of "spreading throughout the world the timeless Teachings of the Buddha." It has two serial publications: The Wheel and Bodhi Leaves. They are distributed in 88 foreign countries and they enjoy a wide readership both among Buddhists and non-Buddhists. The publication under the Wheel series represents a wide spectrum of Buddhist doctrines, presented and commented upon by an array of eminent scholars both from Sri Lanka and abroad. Already nearly 400 titles have been published under this series, with four issues added each year.

5. *Oriental Studies Society*

Established towards the end of the last century, the Oriental Studies Society is a Government-sponsored organization for the promotion of Oriental Studies, particularly studies pertaining to Buddhism and classical languages such as Pali, Sanskrit and Prakrit. As a part of its programme of work, it holds three annual examinations, the Preliminary, Intermediate and Final in Oriental Studies. Most of the candidates who appear for these examinations are Buddhist monks from the *pirivenas*. However, over the years the number of candidates sitting for the examinations conducted by the Oriental Studies Society has been dwindling, this year's number of candidates being only twenty seven.

6. *Royal Asiatic Society (Sri Lanka Branch)*

Established during the British colonial times, this Society has as its aim the institution and promotion of "inquiries into the History, Religions, Language, Literature, Arts, Science and Social Conditions of the present and former peoples of the Island of Sri Lanka and connected cultures," It has its headquarters in Colombo and its academic programmes include, among other things, the publication of a journal and the conduct of meetings and seminars on historical and cultural studies with particular reference to Sri Lanka. Although this Society's academic programmes are not confined to Buddhist Studies, they do represent a good quantum of research and studies on Buddhist themes.

7. *Periodical Publications on Buddhist Studies*

There is only one English-medium journal which is exclusively devoted to advancbd studies and research on Buddhism, namely the Sri Lanka Journal of Buddhist Studies which is published by the Buddhist and Pali University of Sri Lanka. Its maiden issue was published last year with contributions from Japanese scholars as well, and its second issue is scheduled to be out at the beginning of next year. In addition to this, there is published annually the periodical named "World Buddhism." It is a semi-academic journal, containing articles as well as news items on Buddhism and its avowed aim is propagation

of Buddhism and dissemination of Buddhist information. There are four other English-medium journals devoted to humanities and social sciences in which learned papers and scholarly articles on Buddhism find a prominent place. They are:

(a) The Sri Lanka Journal of Humanities, published by the University of Peradeniya.
(b) Kalyani: The Journal of Humanities and Social Sciences of the University of Kelaniya.
(c) Vidyodaya Journal of Arts and Letters, Published by the Sri Jayewardenepura University.
(d) Journal of the Royal Asiatic Society, Sri Lanka Branch.

8. *Conclusion*

As already referred to earlier, due to the prevailing situation in the country, this year's output of publications on Buddhist themes is negligible. However, mention must be made of the following two research studies by Professor W. S. Karunaratne which were published posthumously in the course of this year:

(a) The Theory of Causality in Early Buddhism.
(b) Buddhism: Its Religion and Philosophy.

（カルナーダサ博士は、スリランカのケラニア大学教授で、現在海外仏教研究の嘱託研究員である）

『研究所紀要』第六号

『研究所紀要』第六号が刊行されました。内容は以下の通りです。ご希望の方は研究所までご連絡下さい。

日本僧伝文学の研究史と課題……石橋　義秀
——古代・中世を中心に——
知識社会学の成立と世界観学……千葉　芳夫
近代大谷派教団社会事業の研究……佐賀枝夏文
——大草慧実の慈善事業——
資料紹介『本山上檀古記録抜萃』……真宗学事研究班

昭和六十二年度研究所報告

チベット語訳『歎異抄』……ツルティム・ケサン（白館　戒雲）
近畿地方の重力探査データのコンパイル……西田　潤一
On the "Paracanonical" Tradition of the Tibetan Version of Nāgārjuna's Ratnavali …… Michael Hahn
Ching-ying Hui-Yüan's Position on Devotion and Visualization: Reevaluation of Causal Practices for Rebirth in Chinese Pure Land Buddhism …… Kenneth Tanaka
A Comparison of the Ālayavijñāna with Freud's and Jung's Theories of the Unconscious …… William Waldron
Bibliography of Foreign-Language Articles on Japanese Buddhism 1960 to 1987……海外仏教研究班

研究所彙報

- 1月17日、1989年度「一般研究」応募のうち7件が研究所委員会で承認された。各研究の内容は、本紙4ページに紹介されている通りであるが、それぞれ綿密な計画のもとに研究が構想され、その研究の成果が期待されている。
- 2月19日より安富主事が海外に出張した。3月末日まで米国各大学の仏教研究の方法論の調査と資料収集に従事して帰国する予定である。
- 2月25日『研究所紀要』第6号が発行された。今号より本誌のサイズをA5版からB5版に改めた。
- 各指定研究班からは、西蔵研が、大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書No 2として、ツァンナクパ知識論決択広註『善釈要集』を3月に発刊した。また学事研が、『上首寮日記』Ⅲを5月頃発刊の予定である。

研　究　所　報　第 21 号

1989年3月30日　発行

編集発行　大谷大学真宗総合研究所

〒 603　京都市北区小山上総町